

# Center News

Center for Educational Research and Practice  
Faculty of Human Development, University of Toyama

第22号

(2006年3月31日発行)



佐伯真人画

## ふきのとう ラガーはボールを 土に挿す (和義)

ラガーとはラグビー選手である。ふきのとうの芽はラグビーボールにも似ている。今、正に芽が出たふきのとう、それは土に挿されたラグビーボール。これから大きく蹴られる瞬間である。ボールは青空に向かって羽ばたこうとする。これからのセンターを表してくれていると感ずる。

## センターニュース22号 目次

- |      |      |                               |
|------|------|-------------------------------|
| 02   | 巻頭言  | 本当の意味での地域連携とは何か               |
| 03   | 提言   | 学部及び附属学校共同研究プロジェクトに思う         |
| 04   | 報告   | 第4回発達と臨床の心理学講座                |
| 05   | 報告   | 現職の先生を対象とした研修会                |
| 06   | 報告   | 学校と大学とが手を携えて - 「心と教育の相談室」は、今- |
| 07-1 | 寄稿   | 客員教授就任にあたって                   |
| 07-2 | 寄稿   | 教職を目指す学生への支援                  |
| 08   | 学園通信 | [幼稚園では、小学校では]                 |
| 09   | 学園通信 | [中学校では、養護学校では]                |
| 10   | 報告   | ビジュアル・トライアスロン2005             |
| 11   | 報告   | マルチメディアセミナー                   |
| 12   | 報告   | 国際理解教育・開発教育研修会                |
| 13   | 報告   | 子どもとのふれあい体験                   |
| 14   | 報告   | 学習活動サポート事業                    |
| 15   | 報告   | センター協議会・教大協北陸地区会議             |
| 16   | 業務報告 | 平成17年度の実践センターの主な行事            |

センター長 市瀬 和義

平成17年度は我がセンターにとって歴史的な年であった。

なんといっても先ず第1に、新しいセンターの発足である。昨年10月1日に旧富山大学、医科薬科大学、高岡短期大学が統合し、新・富山大学が誕生した。駅前タクシーに乗り「富山大学」と告げると「五福キャンパスですか、杉谷キャンパスですか」と聞かれるようになった。嬉しいような、こそばゆい思いがする瞬間である。教育学部もその看板を下ろし、人間発達科学部となった。同時にセンターの名前も正式には、富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センターというおそろしく長い名前となった。私などセンター長でありながら、きちんとした名前がなかなか言えず苦労した覚えがある。センターの教員間では今まで通り「実践センター」の略称で呼ぼうということになっている。

第2はスタッフの増員である。教員としては新進気鋭の尾崎康子先生を迎え、臨床部門はさらに充実した。尾崎先生に対する期待は大きいものがある。また客員教授として、これまで心の相談室を中心に力を注いで下さった日俣順子先生と共に、本多信昭先生、齊藤昭先生をお迎えし、教員養成の強化にも力を入れることができた。

センターが新しい名前を冠することをきっかけに、私たちは半年以上かけて、これからのセンターがどう歩んでいったらいいか協議を重ねてきた。具体的にそれは、人間発達科学研究実践総合センターの新しいパンフレットに形となって現れているので参照されたい。

昨年の巻頭言に私は地域連携を「本務」に、そして実践を学問にした「実践学」の構築をしていきたいと述べた。今でもその考えは変わっていない。年末から、富山県教育委員会と人間発達科学部の包括的連携が具体の形となって現れてきており、センターがその中心的役割を担うことが明確になってきた。

しかし、反面心配するのは、センター教員が全て抱え込んでパンクするのではないかという恐れである。センターの教員はセンターの仕事だけしているのではない。それぞれ学部や大学院でも同じように授業を持ち、卒論・修論指導もしている。オーバーワークになっているのは事実である。また本来のセンター教員としての仕事がおろそかになってしまう時も少なからずある。全体的に「疲れている」感じを否認しない。

この問題について考えているとき、今年2月18日に行われた第3回「大学と地域連携」のシンポジウムで西頭学長は、「疲れるようでは真の連携ではない。地域連携は第2段階に入ってきており、これからはいかに持続するかだ」と端的に述べられた。正にその通りである。連携というといかにも上から与えるという感じが強い。連携でなく、連関だ。連携というより融合だ・・という声もあった。つまり、互いに得るもの、連携の中に自分の生き生きとする場がなかったら連携ではないというのである。

私たちの中には、まだ地域連携の活動はなかなか評価されてない、分かってもらえないなどの不満があり、何か地域のためにしてやっているのだなどという高ぶった意識があることは否認しない。NPO法人が指摘する地域連携のヒントにもあるように、もっと自然に、そして互いに高め合う連携、それこそこれからの課題ではないかと思う。

センターの活動が見えないという声もあった。我々はセンターのホームページを充実し、広報にも努めている。今後、何か困ったらセンターに力をかりる、そしてそこでパワーをもらってまたそれぞれの場所で頑張れるようになったらいいと思う。大学という知を提供できる部分と地域を結ぶ接点としてセンターが機能していける、しかも生き生きと活動できたら素晴らしいと思うし、そんなセンターを目指していきたいと考える今日このごろである。

3月末で佐伯真人教授が退官される。前センター長として、センターの発展に尽くされた。センター教員一同、心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。佐伯教授の描かれたプロ顔負けの水彩画は、しばしば私たちの心に潤いをもたらしてくれた。表紙絵はふきのとうである。これから伸びんとするセンターに相応しい、清々しい絵であると思う。

## 提 言

# 学部及び附属学校共同研究プロジェクトに思う

センター教授 佐伯 真人

昨年10月1日、教育学部が人間発達科学部となり、それを機会に組織の改編が行われるなかで、「学部及び附属学校共同研究プロジェクト運営委員会」は附属学校運営委員会に吸収され解消した。わずか5年余存在しただけの委員会であったが、この機会に発足からの足取りを振り返ってみることによって、今後の学部と附属学校との連携の在り方を考えてみたい。

私が富山大学教育学部附属教育実践総合センターに着任したのは平成12年4月のことである。当時学部の将来計画についての論議が進んでおり、同年7月の教授会で、学部の将来構想と教育研究活動の基本的方針と具体化が提案され了承された。その中に附属との連携の必要性が唱えられ、その具体化として「学部及び附属学校共同研究プロジェクト運営委員会」を発足させることとなったのである。9月に委員が選出され、同月からセンター長になっていた私はそのメンバーとなった。当時センターの専任は二人だけで、もう一人は学部長だったので、必然的に私にまわってきたものであった。

実際に運営委員会が動き出したのは、その年の10月のことである。2度の学部内での準備会を経て、11月1日に第1回運営委員会が開催された。集まった委員はとても意欲的であり、開発学校に名乗りを上げることも視野に入れて、『『幼少中の一貫したカリキュラムづくり』に関する実践的研究』を全体テーマとし、共同の研究発表会を行うことが決められていった。現在同様の研究が開発学校として行われていたりする現状を見ると、こうした方向性は決して誤っていたとは言えないが、広報活動などが不十分であったことなどから、運営委員会の熱意を全体に広げることができず、様々な温度差を生むことになったことや、明確なビジョンをもたないまま「走りながら考える」という形でスタートしたことなど、振り返って見ると様々な大きな課題があった1、2年目であった。（『富山大学スクラムプラン中間報告書2001』参照）

平成14年11月29日に共同研究の発表会が附属学校園を会場にして開催された。（『研究発表会要項』『平成14年度共同プロジェクトの記録』参照）

当面2年間を目処に進められてきた共同研究は、一応ここで第1ステージを終え、平成15年度から新たなスタートを切ることになった。ここからは、ややトーンダウンをし、今年度も行われている「グループ研究」「共同研究会」「附属間の研究交流」の三つの柱で進める形がとられることとなった。まずは日常的な活動の中がかかわりあいを深めることが大切であるという認識と、ともかく継続していくことが大切であるということからの判断であった。

学部と附属学校とのかかわりでは、毎年10近くのグループが作られ研究が行われるとともに、年2回の共同研修会が実施されてきた。グループ研究はグループにより活動の差はかなりあるものの、継続することをまず第一のねらいとして続けてきたと言えよう。（『富山大学スクラムプラン2003』『同2004』『同2005』参照）

昨年10月1日に新大学が発足するとともに、教育学部が人間発達科学部に変わった。これと同時に、「学部及び附属学校共同研究運営委員会」は「附属学校運営委員会」に吸収され、5年間の役割を終えた。しかし、より大きな組織の中に位置付けられて、今後はこれまで以上に深い連携と内容のある共同研究が進められて行くに違いないと強い期待をもっている。実践センターもその中で中心的な役割を担わなくてはならないと考える。

# 報 告

## 第4回 発達と臨床の心理学講座

### 「教室や保育における発達障害児への支援— 特別支援教育と研究の最前線から」

センター教授 尾崎 康子

教育臨床研究部門では、メインテーマを「教室や保育における発達障害児への支援—特別支援教育と研究の最前線から」として、外部の講師を招いて2回シリーズの「発達と臨床の心理学講座」を行った。昨今の特別支援教育の推進に加えて、平成17年4月からは「発達障害者支援法」が施行され、発達障害を取り巻く状況が大きく変化している。今年度7月にも特別支援教育に関する研修会を行ったが、継続の要望が多く寄せられたことから、さらに特別支援教育研究の第一線でご活躍の講師を招き、教育と研究の最前線の内容をとりあげた。富山県内の小中学校や養護学校の先生及び市民の方々を対象に、参加者を募ったところ、第1回は87名、第2回は70名の参加があり、盛況のうちに終了した。また、研修内容についてアンケートを実施したところ、専門的で最前線の内容が研修できてよかったという声が多数寄せられた。

#### 第1回（平成17年11月12日） 講師：茨城大学教育学部教授 東條吉邦

テーマは、「自閉症・ADHD・LDの理解と支援」であった。昨今急速に変化していく発達障害に関する概念や施策について、詳細な資料のもとに最新の情報が講義された。文科省の全国実態調査によりADHD、LD、高機能自閉症など軽度発達障害の発症率は6.3%と報告されたことに伴い、軽度発達障害児への教育的援助が行政によって取り組まれていく経過が示され、参加者も障害児教育の現況を行政の施策との関連で捉えることができた。また、後半は、自閉症をめぐる新たな動向として自閉症の新しい概念である「自閉症スペクトラム」について詳細な内容が講義された。

#### 第2回（平成17年11月19日） 講師：筑波大学心身障害系教授 前川久男

テーマは、「発達障害児の心理アセスメントからみえるもの」であった。講師の前川先生は、K-ABCやWISC-IIIなどの心理テストの日本版の開発を行っておられる。それらの心理テストについて、その理論的背景と各下位項目の認知構造が詳細な資料のもとに説明された。また、発達障害児の心理アセスメントにおいては、数値で表された心理テストの結果をただ検討するだけでなく、心理テストの各下位項目の結果から発達障害児の認知構造の特徴を読み取ることの可能性と重要性が示され、参加者は心理テストを深く解釈することを研修した。



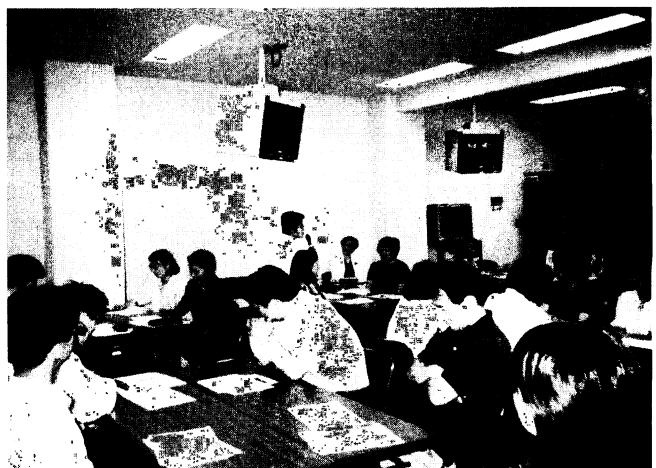
### 軽度発達障害児の理解と対応—教室における特別支援教育—

センター助教授 稲垣 応顕

教育臨床研究部門では、平成17年7月9日（土）に、岐阜大学教育学部助教授の平澤紀子先生を招き、標記の研修会を行った。研修内容は、前半が講師による講義、後半がミニフォーラムであった。なお、フォーラムのパネリストは、講師に加え当センターの尾崎康子教授、日俣順子客員教授、それに筆者である。また、当日の参加人数は、73人であった。

前半の講義では、発達障害の概念の後、その障害があると子どもたちは未学習及び不足学習・誤学習・過剰学習が生じやすいことが話された。また、そのまとめとして講師は、発達障害を「やりにくさの障害」と述べた。また、そのような子どもたちとの関りや教育活動に際しては、子どもの行動を状況の中で捉えることが重要であることが話された。換言すれば、これは子どもたちの行動の意味を知ることであり、「子どもたちは、どのような場面で、どのような問題行動を起しているのか。また、我々教師はその行動にどのような対応をしているのか。その対応が、子どもたちの問題行動をさらに誘発していないか」について振り返る必要があると述べた。つまり、自分に注目して欲しくて逸脱行動を起す子どもに、教師がその行動を抑えようとするのが、子どもにとっての要求の達成(成功体験)になっている事例、したくない課題を逸脱行動で乗り切ってしまう事例などを紹介した。そして、気になる困った行動をその子が示すニーズとして捉え、その「子どものニーズに応じた対応」を行なうことが大切であると述べた。その上で、「次の行動の予測が確認できる配慮」、「課題の結果にこだわらず、課題に取り組んだことを認めていく」など、具体例を掲げながら説明した。

一方、後半のミニフォーラムでは、気になる子どもの判別のヒントや参加者が関っている子どもへの個別対応の仕方また留意点、他の子どもたちとの交わせ方や学級全体としての取り組み方などについて、活発な意見交換が行なわれた。



## 学校と大学とが手を携えてー「心と教育の相談室」は、今ー

センター客員教授 日俣 順子

「翼を休めてみませんか」のキャッチフレーズで「心と教育の相談室」は、スタートした。様々な子どもたちの問題行動と向き合う多くの先生方から、「しばし、翼を休め、一呼吸入れる場があれば」と願う声が届けられていた。鋭角的に問題の本質を捉えることも大切だが、自分自身の心を一時解放し、ゆったり全体を多面的に見たいと言う思いがあったのだろう。子どもを中心に据えながら、大学が学校と連携をとり、学校を支援できたらと願っていた。

その思いとは違い、まず始めに相談室のドアをノックされたのは、不登校の子を持つお母さんたちであった。そして、様々な心の問題を抱えた子の親御さんたちであった。学校にはカウンセリング指導員や、スクールカウンセラーも配備されつつあったが、学校という建物の中ではなく、もう少し違った相談の場を求められたのだろう。

「心と教育の相談室」は、まずその求めに応じ、真摯に向き合った。一日も早く、学校との連携を、学校とのコンサルテーションをとる思いはあったが、自然にその時が満ちるのを待った。来談者の声にひたすら耳を傾け、子どもの叫びを聞き取ろうと努めた。

問題が解決し、終結を見るケースが増え始めた頃、学校からのコンサルテーション依頼が舞い込み始めた。一つのケースに関し、子どもとのプレイセラピーに携わった学生の側からの報告、親面接の経過からの側面、学校での見方や経過を出し合い、検討していく。そして、苦勞なさっている先生方の労をねぎらい、ゆっくり翼を休めて頂く。こんなことが、今少しずつ行われ始めている。

そんなコンサルテーションでの一場面である。

A先生は、不登校のこの子に何もしてやれない自分を責め、不登校に至らせたのも自分が要因になっていたのではないかと自分を責めて苦しんでおられた。プロジェクトを組んでいる他の先生方も一向に登校の兆しを見せないことに焦りを感じておられた。「週1回の家庭訪問しかしていない」とのA先生のつぶやきに「こう、置き換えてみては」と提案する。「週1回も続けている」と。そして、プレイルームでこの子が描いた絵の中に、家でトランプしているA先生の顔を見つけられ、先生の顔がぱっと輝いた。小さな営みに見えても、ちゃんと先生の思いが子どもに伝わっていることを実感された。その営みの意味づけがなされたとき、先生方は、次への方向までも見つけ始められた。

多面的に子ども理解をし、それぞれの先生方がなさっていることを意味づけ、勇気をもって前に進むことをお手伝いする、これが今、「心と教育の相談室」でコンサルテーションとして行っている一端である。

難しいとされる不登校や、いじめなど子どもの心の問題解決への支援に相談室やプレイルーム、そして、学校とのコンサルテーションが今後も役立っていくことを願っている。



## 寄稿

## 客員教授就任にあたって

センター客員教授 本多 信昭

近年、厳しい採用状況を背景に、教員を目指していたはずの学生たちが、早い段階から教員への道をあきらめることが少なくないようです。

教員は、人生の後輩たる子どもたちの明るい未来づくりに携わるという夢のある職業です。私は教員を目指す学生たちに教員の仕事の魅力を伝え、就職準備をサポートするため、本年度5月より活動しています。

具体的には、ホームページ「先生になろう」のページを作成することと、(学生)就職資料室での面談やEメールでのカウンセリングを通しての活動です。ホームページの作成は全くの素人でしたが、教員OBとしての経験をできるだけ具体的に伝えたいとの思いが新しい分野への挑戦となりました。また、情報分野での経験が少ない学生に多く接しましたので、「(高齢者でも)やればできる」というお手本になればと思い、ホームページの作成を学生に宣言し、開設しました。

有言実行で「率先垂範」することは、教員の習性といえます。しかし一方で、学校から社会に出た教員は指示することが多く、共に汗を流して活動することが少ないと批判される面もあります。口先の理屈だけでなく、世の中の潤滑油の働きができるよう、自分を磨き、小さな親切(思い)を率先垂範できるよう努力しますので、よろしくお願いします。

なお、ホームページはURL：<http://www.edu.u-toyama.ac.jp/teacher/>です。富山大学関係者の情報なので、ID:koshiとPassword:meirinを設定しました。ご覧のうえ、ご意見を頂ければ幸いです。

## 教職を目指す学生への支援

センター客員教授 齊藤 昭

昨年(2005年)6月に非常勤講師(客員教授)の委嘱を受けた。担当分野は、教師教育研究開発部門である。また、10月からは、教育実践総合センターから人間発達科学研究実践総合センターへとなっていく中で、どのような取り組みができるか不安もあったが、先生方のご指導を得ながらスタートすることができた。

研究実践総合センターの機能の一つとして学習環境研究部門があげられている。そこでは、教員を目指す学生及び現職教員の指導力向上にかかわる実践的な研究及び教育を担当していくことが必要である。特に、教員を目指す学生への教職に対する意識付けや教育実習における事前・事後指導にかかわっていくことが大きな役割となる。

このような中で、これまで「就職ガイダンス」において6回にわたって学生とかかわり、話をしたり相談を受けたりする機会があった。6月からの4回は、7月ごろから実施される教員採用試験に向けての場であり、10月からの2回は、学生に教育実習を終えて教職への心構えをしっかりとらせる場にしたいと考えた。

現在、教員に対する期待はこれまで以上に高まっている。学校では、様々な教育活動はそれぞれの学級を単位として展開されていくことが多い。そこでは、学級担任が核となって子どものための各種の教育活動が行われるのである。このようなことを背景に、学生には教員に求められる資質や教員像を学校現場の具体的な姿を通して語りかけてきた。また、教育実習を通してこれまでよりもよりいっそう、子どもの側に立ち、個に応じた指導を展開し、子どもとの触れ合いから得るものを大切にしていってほしいと願っている。そして、何よりも教職に対する希望と自覚をもつ学生が増えることを願っている。

## 学園通信

### 幼稚園では、

今年度は、子どもが夢中になって集団的な遊びに取り組む過程で、個と個の関係性がどのように育っていくのかを考察したいと思い「集団の中で育つ個と個の関係性」を研究主題に掲げ、研究に取り組んできました。また、全国学校体育研究協議会とも重ね合わせて行うことになり、心も体も意欲的に動く子どもを思い描きながら保育を進めてきました。

フォーラム当日。3歳児は、保育室の天井から吊されたスズランテープのお化けに誘われ、楽しい遊びのイメージの中で心を安定させて遊ぶ様子が見られました。4歳児は、保育者と一緒に忍者ごっこを楽しみながら園庭を駆け回ったり、大きな段ボールを素材として家作りをして、身体全体を使って遊ぶ様子が見られました。5歳児は、竹で作ったアスレチックで竹渡りの技を磨いたり、竹をリズムカルにたたいて恐竜コンサートを開いたりしました。

幼児期は心が安定して初めて様々な活動に取り組み、体を動かし始めること、保育者は子どもが自ら意欲的に活動できるように、一人一人の発想や興味・関心を大切にしている。人的・物的環境の工夫を行うことなどの大切さを再確認しました。

今、集めた事例を分析し、個と個がどのように育ち合っているのかを考察して紀要にまとめているところです。



### 小学校では、

「対話する子供を目指して」を研究主題に掲げてから、第3年目を迎えました。本校の学校研究の中核は「授業研究」です。今年度も、各教科等の研究授業において、米田先生をはじめ、多くの学部の先生方に指導をいただきました。また、昨年度から「対話」を支える3つのサブシステムの整備に力を入れたことで、「対話」に一步近づくことができました。

3つのサブシステムとは、「心の健康」、「環日本海交流」、「IT」です。これらには、稲垣先生、高橋先生をはじめ、留学生や学生さんたちにもご協力をいただきました。

「心の健康」は「対話」の大前提です。コンサルテーションでは、学級内の序列化、子どもの学校生活エネルギーの衰退など、子どもの心の健康を阻害する要素が明らかになりました。これにより、教師は、一人一人の得意なことが生きるように配慮したり、学級内で認められるように援助したり細やかな支援をすることができました。

「対話」の実践場面としての環日本海交流では、韓国、中国、ロシアの小学校との間で互いにとびこみ授業を重ねてきました。これにより、教師の間に信頼関係が生まれました。また留学生が、年に1回ずつ3年生以上の各教室に入って授業を行っていただきました。各国の挨拶、地理、服装や食事など日常生活の紹介を中心とした内容でした。このような活動を通して、子どもは、異質なものを受け入れさらに働きかけるという、「対話」へ向けての資質が養われていきました。

「対話」のツールとしてのITでは、コンピュータ管理システムを導入し、コンピュータ室だけでなく教室前に配置したコンピュータも一括管理できるようになりました。コンピュータが子どもたちの身近なものになるにつれて、「対話」のツールだけでなく、「調べ学習」のツールとしての新たな可能性が見えてきました。さらに「対話する子ども」を育てるために、子どもたちがどのように「調べ活動」を作り出していくのかという課題も見えています。

「対話する子どもを目指す」授業は、これらサブシステムとの統合の上に成り立ってくるものと思います。来年度は、いよいよ「対話する子どもが育つ教育課程をつくる」という研究の中核に進みます。今後も研究や実践を積み重ねていきたいと考えています。



## 中学校では、

### 主体性の高まりをめざす課題学習

中学校では、研究主題である『主体性の高まりをめざす課題学習』の解明に継続的に取り組んできました。平成15年度からは、「確かな学力を身につけさせるための指導と評価」を副題に掲げ、教科教育に重点をおき、確かな学力の定着を図るための指導と評価についての研究に取り組んでいます。「基礎・基本の定着」「発展的な学習の取り扱い」「基礎・基本の定着を見とる評価の在り方」などについて実践をもとにした研究を中心に進めています。今年度の教育研究協議会では、「社会科」「理科」「技術・家庭科」「保健体育科」「総合的な学習の時間」「学校保健」の発表を公開しました。平成18年度の教育研究協議会では、「国語」「数学」「音楽」「美術」「英語」「総合的な学習の時間」の発表を予定しています。

また、学部及び附属学校園による共同研究プロジェクト「富山大学スクラムプラン」との連携については、社会科、理科、英語で教科教育に関する研究に参加しています。教科の本質を問い直し、学ぶ力の育成に対して、教科が担うべき役割を追究していくうえで、小学校の学習との系統性を踏まえていくことも重要であり、今後も継続的な共同研究につながることを期待しています。さらに、今年度は全体研修会で、総合的な学習の実践を紹介し、様々な示唆をいただくことができました。今後の指導の改善に生かしたいと思います。

## 養護学校では、

平成17年度は、170名あまりの学生さんが養護学校での介護等体験実習を行いました。1回目は、障害のある児童生徒とどのように接して良いのかがわからないという不安を抱えて来校される人が多いのですが、1日の実習を終えると満足そうな様子に変わり、2回目には明るい表情で来校されます。児童生徒と挨拶を交わす中で自然に不安は消え、一緒に活動する中で不安が楽しさや充実感へと変わっていくようです。

介護等体験実習を終えた学生さんの感想をいくつか紹介します。

- 全く勉強をせずに介護体験にきたのでどのように対応すれば良いのかがわからず、正直困りました。どのような障害があるのかを把握して予習をできたら良かったと反省しています。
- 中学部高等部の生徒の皆さんはとても礼儀正しかったです。私達大学生も見習わなくてはならないと思いました。
- 一番印象に残っていることは、生徒が困っていたら他の生徒が助けてあげる、また、生徒が間違ったときには他の生徒が注意をするということが当たり前に行われていたことです。お互いが協力し、注意し合える附養の生徒達はとても素晴らしいと思いました。
- 朝は何を話しているのかがわからず不安でしたが、時間が経つにつれて、少しずつわかるようになりました。一人一人に合った指導が必要なことがわかりました。
- どの学年の生徒も自ら目標を持って黙々と真剣に取り組んでいる姿が見られ、日々の努力の積み重ねが大切であるということを改めて感じました。
- 生徒一人一人が目標をもち、それに向かって日々努力している姿を見て、自分も負けずに努力しようと強く感じました。
- わからないことが多く少しとまどったけれど、先生方からいろいろ教わったり、子ども達と接したりすることで慣れてきて会話もできるようになりました。すごく楽しかったです。ぜひまた来たいと思います。

今後も、学生さんと養護学校の児童生徒の両者にとって意義のある介護等体験としていきたいと考えています。

# 報 告

## ビジュアル・トライアスロン2005

平成18年2月16日から18日にかけて、ビジュアル・トライアスロン2005を3日間の日程で開催しました。この研修会はマルチメディア作成の最先端の技術を習得する目的で、学生が3日間（48時間）の短期集中で作品を作りながら技術を学ぶものです。これで4年目を迎えました。講師には、元マクロメディアの三木功次さん、アップル公認インストラクターの渥美聡子さんのお二人に来ていただきました。富山大学側からは、人間発達科学部の上山先生、鼓先生、小川が指導と運営にあたりました。院生の笹倉さんにも、作品の公開の技術などいろいろと手伝っていただきました。

1日目の午後から作品のシナリオ作りと、撮影、材料集めを開始して、作品作りの期限は3日目（18日）の昼の11時と設定しました。途中で、何回か経過報告を入れながら、学生が3名から4名で1チームを作って作品作りに取り組みました。今年のお題は「CM60秒」。テーマ設定の意図は、限られた時間（60秒）の中に訴求力のある表現を構築することが、学生の力を伸ばすと考えたためです。自分たちでテーマとストーリーを決めて、作品作りを行いました。今年、5つの班が作品を作り上げました。下記のURLに作品が公開されていますのでご覧ください。ただし、サイズが非常に大きいので、再生にかなり時間がかかります。ご容赦下さい。

ビジュアル・ライアスロン2005 <http://kureha.cerp.u-toyama.ac.jp/~vt/2005/>



豆乳



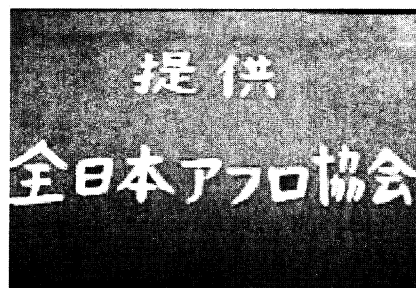
携帯電話「コーク」



牛乳のもう



数屋のトマトソース

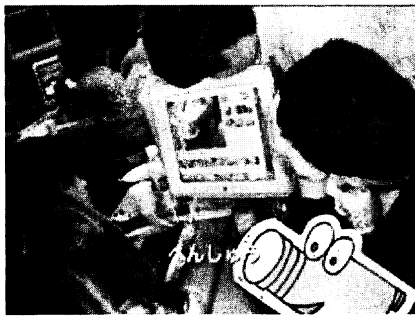


アフロヘア

# 報 告

## マルチメディアセミナー

平成18年3月5日(土)に第4回のマルチメディアセミナーを開催しました。会場は実践総合センター1階の演習室で行いました。学部学生10名が4つの班に分かれて、デジタルビデオ作品を制作しました。講師は元マクロメディアの三木功次さん、アップル公認インストラクターの渥美聡子さんのお二人にお願いしました。



午前中に、簡単な作品の作り方(テーマの決定、ストーリー作成、絵コンテ)とカメラの使い方の説明を行ったあと、実際の作品作りを行いました。しかし、今回は残念なことに子どもの参加がなく、会の本来の目的を達成できるか心配でした。いろいろな学校にお願いに上がったのですが、希望者がいなかったのです。そこで、今回のテーマを、このマルチメディアセミナーを紹介するプロモーションビデオ作りと決めました。各作品の一場面が上の写真です。それぞれ力作が揃いました。来年度は、このプロモーションビデオをもって、各学校を回り、参加者を募りたいと思います。



### <新しい映像教材編集環境が整いました>

右上の写真は、実践センターに新しく導入された iMacG5 をマルチメディアセミナーで利用しているところです。4月から実践センター1階の演習室で、iMacG5 10台と PowerBookG4-17インチが10台、PowerMacG5が1台の計21台利用可能になります。授業はもちろん、これから大学に求められる遠隔授業など授業教材の作成にご活用下さい。利用方法に関しては小川 ([gawagawa@edu.u-toyama.ac.jp](mailto:gawagawa@edu.u-toyama.ac.jp)) までお問い合わせ下さい

センター教授 佐伯 真人

今年度の国際理解・開発教育研修会は、昨年に続き「参加型学習・ワークショップの体験を通して」というテーマで、11月26日（土）に、同志社女子大学教授藤原孝章先生を講師に迎えて行われた。

今回の研修会では、参加者に「レヌカの学び」というワークショップを実際に体験してもらい、その中で、文化についての見方・考え方について検討しあった。この研修を通して、国際理解教育・開発教育の意義やねらいについての理解を深めてもらうことをねらいとしていた。

会場は富山大学人間発達科学部の多目的教室であったが、ちょうど会場一杯の40名の参加であった。藤原講師から、前半は「4つのコーナー」、後半は「レヌカの学び」のワークショップを通じた研修を受けた。「レヌカの学び」というのは、ネパールからの研修生が来日して出会ったこと、感じたことをもとに考えたネパールと日本の文化の違いを、カードにし教材としたものである。

小・中・高等学校教諭や学生など幅広い参加者があったが、ワークショップの活動に生き生きと参加されている様子が印象的であった。次のような感想が寄せられている。



○日本とネパールの生活習慣や文化の違いに着目して、カルタを分けていくという活動が大変おもしろかった。グループで『日本とネパールのどちらだろうか、その理由は何だろうか』と考えていくうちに、『日本の生活習慣や文化の特色』を改めて見直すことができたと思う。国際理解教育というと、私たちはとかく外国の文化について学ばよと思いがちだ。しかし今回の活動では、まず『日本のことを理解』しようとして『外国のことにも関心』をもつということが本当の意味での国際理解につながるということが分かった。（中学校教諭）

○「レヌカの学び」では、自分だったらこうするだろう、ネパール人なら多分こうじゃないかと、思わず夢中になって取り組んでいました。それは、グループの人と各々の考えをぶつけ合い、ゲーム感覚で活動する中で、自分の知らない文化を知り、違う考え方に触れることによって考えを深めることができたからだと思います。異文化を見つめるとともに、自分自身の生き方を見つめる一つの契機とすることができる、この教材の面白さを実感すると同時に、こうした学習の大切さを感じました。（小学校教諭）

○まず、レヌカさんとネパールに対して次第に親近感を感じるようになりました。ささやかな日常の暮らしに溶け込んでいるそれぞれの国の風土、政治、習慣、文化、宗教などに対して興味がでて、外国の暮らしぶりにあれこれ思いをめぐらせました。次に、知っているはずの日本の生活についても、外国との比較となると、実はよく分かっていないことにも気がきました。そして最後に、同じ人が数年という短期間で、暮らし方や将来の夢などまで変化させてしまったことにとっても驚きました。社会の持つ個人への影響の大きさについて、現実感をもって初めて捉えることができました。楽しかったです。（院生）

センター教授 佐伯 真人

今年度の「子どもとのふれあい体験」は、次の5つのコースで実施された。( )内は担当教員

- ①科学で遊ぼうコース (市瀬和義)
- ②ものづくりコース (竹井史)
- ③遊び援助コース (小林真・生田貞子・吉見昌弘)
- ④学習障害をもつ子どもへの援助コース (武蔵博文・水内豊和)
- ⑤野外活動コース (広瀬信・黒田卓・佐伯真人)

一年間の活動の成果を発表し他の経験も参考にできるように例年催される「子どもとのふれあい体験交流発表会」が、今年度は2月24日(金)に開催された。学生70余名と担当教員の他、受け入れ施設の担当者など数名の来賓も迎え、3時間半の発表会が行われた。今年度から、発表会の準備段階から学生による準備委員会により計画され、司会と進行も全て学生の手によって行われた。



この発表会での報告などにおける学生の感想のいくつかを拾ってみる。

かなり疲れたけれど子どもの笑顔で頑張れた。もっともっと子どもの笑顔が見たいと思った。貴重な経験ができてよかった。<科学で遊ぼう>

最初は何も分からなかった私たちも、先輩と一緒に活動することで、子どもの視点で考えることの大切さや、子どもたちの興味を引き出すさまざまな工夫を知ることができた。親子フェスティバルの当日、子どもたちと一緒に一生懸命遊び、ふれあえたことは貴重な体験になった。<ものづくり>

・さまざまな活動を通して、一人ひとりに合った対応をすることの大切さを学んだ。ずっと同じ子どもと接してきたからこそ分かることがたくさんあった。・初めての経験で、毎回子どもたちといろいろな活動をするのがとても新鮮だった。最初はコミュニケーションのとり方が分からなかったが、今は自分から子どもたちに接していけるようになり、子どもとのかかわりに少し自信がもてるようになったと思う。<学習困難を示す子どもの援助>

最初はどのように子どもに接したらよいのか全く分からなかったが、何度か活動の補助を行うことで少しずつ手助けをするタイミングが分かるようになった。それは児童館の指導者の方の対応から学んだことで、彼らの偉大さを知るとともに、常に子どもの目線に立って考えることの大切さを学んだ。ふれあい体験に参加して、ひとまわりもふたまわりも自分自身が成長できたように思う。<遊び援助>

子どもとかわるのは、ただ「楽しい」ということだけではなく、初めて責任をもって子どもの命を預かる立場になり、教育の大変さや難しさも多く学んだ。大変な5泊6日だったが、一生の財産となる体験ができた。<野外活動>

人とのコミュニケーション能力がなく、教育実習を受けるときに初めて子どもと触れ合っ、パニックを起こす学生たちが増えている中で、貴重な体験として着実に成長してきている事業といえよう。

センター教授 佐伯 真人

昨年度からの学習活動サポート事業6校が2年目を迎えた。昨年度まで行われていた、富山地区の3校における放課後チューター事業が終了したため、今年度の6校は、遠方の学校が多く、参加した学生にとってはかなりの負担になったと思われるが、それでも年間を通して活動をつづけてくれた。授業の関係で夏休みだけの参加や前期或いは後期だけなど、活動の程度は多様であるが、登録した学生は58名であった。

遠距離の学校が多く学生の確保が難しかったこと、学生の空き時間と活動との調整が難しかったことなど、昨年度から続く解決されない課題も多くあったが、実施した学校においては、子どもの学力向上という面だけでなく、学校の活性化にも役立つなど成果が多く見られたとのことで、来年度からも何らかの形で継続したいという学校が多くあった。参加学生にとって有意義なことは当然ではあるが、そうした声を聞いてみた。

○生の子ども達と触れ合う大きな魅力がありました。さらに、教育実習生を受け入れたこともない荻生小の子ども達は、未熟な私達を最初から素晴らしい新任の先生として迎え入れてくれたようでした。しかし、それが私を悩ませました。教育実習では実習生は失敗しても、どんどん「これ違うよ」と言ってくれますが、荻生小ではサポーターが間違はずがないという思いから、私が間違ったことを正しいと言ったためパニックに陥らせたこともありました。しかし、こうしたことを克服することでより絆を深められました。教育実習では味わえないことを味わえました。 <山本哲也（社会科教育2年）魚津市立荻生小学校>

○前年度に引き続き、朝日中でのサポーター活動に参加しました。2年間の活動を通して、たくさんの生徒とかかわりを持ちました。生徒と接するにあたっては、良いことばかりではなく、悩むこともありますが、他ではできない、かけがいのない経験をするのができ、参加して本当によかったと思います。

<寺崎あゆ子（国語教育2年）朝日町立朝日中学校>

○教育実習では、与えられた課題を支援してもらいながら考える客体的な方法で学校教育に関わったのに対し、自分自身で課題を見つけ、自分なりに考え行動するといった主体的な方法でかかわることができました。また、高岡市独自の「ものづくりデザイン科」の研究授業などにも参加させていただき、授業分析の視点や子どもの指導方法などについて先生方から助言を受けることができ、貴重な経験ができました。

<武田友寿（社会科教育4年）高岡市立定塚小学校>

○1年を通して行った学習サポーターの一番良かった点は、じっくりと長期間にわたって生徒達とかかわれたことです。授業や放課後学習などサポートすることで、生徒達と気軽に声をかけやすい関係になれば、より細かな指導ができたと思います。また生徒ごとに教え方の工夫やポイントなどを自分なりに見つけることができ、とても勉強になる経験でした。 <金森美幸（教育情報システム4年）高岡市立五位中学校>

○福野小では、教育実習とは違い、即チームティーチングや放課後学習の講師として現場に入れられたことが教師としての力をつけるのに役立ったと思います。生徒の実態も様々で、そうした子ども達に数多く接することは、大きな経験でした。また児童の元気に触れることで、自分自身も元気になれば、ほんとうに毎週が楽しみでした。

<鶴田健（社会科教育3年）南砺市立福野小学校>

○放課後も学習に取り組む子ども達は真剣で、それに応えるために工夫を凝らしたり、先輩方からアドバイスをもらったりしました。もちろん自分の未熟さに悔しい思いもしましたが、一年間の活動を振り返ってみるとそれさえも貴重な経験だと思えました。

<山田薫理（障害児教育1年）南砺市立福光東部小学校>

### 【日本教育大学協会北陸地区会教育実践研究指導部門研究協議会報告】

平成17年9月12日(月)に、上越教育大学学校教育研究総合センターを会場に、表記の会議が開催されました。福井、金沢、富山、上越教育、新潟、信州の各大学の実践センターの代表が参加しました。富山大学からは佐伯、市瀬、尾崎、小川の4名が参加しました。以下のような内容について協議を行いました。各大学が教職大学院やGPにどのように取り組んでいるかについて詳しく情報を得ることができました。今後の富山大学の人間発達科学研究実践総合センターにおける教育実践学の構築の参考になりました。

#### (1) 協議事項

- 実践学をどのように構築するか
- センターの指導学生の受け入れ態勢について
- センターによる全学教育実習体制化の可能性について
- 附属学校と大学との連携活性化におけるセンターの役割

#### (2) 承合事項

- 障害児教育関連免許に関する法改正の対応について
- 専門職大学院の動向と、センターのかかわり方について
- センター活動(特に地域連携)の活性化の取り組みについて
- 相談事業の内容と位置づけと広報方法 他

### 【国立大学教育実践研究関連センター協議会報告】

#### センター協議会報告1

平成17年9月22日(木)に第67回国立大学教育実践研究関連センター協議会が、香川大学教育学部を会場に開かれました。市瀬センター長、尾崎(教育臨床部門)、佐伯(教師教育部門)、小川(教育実践部門)の4名が参加しました。当日は前半が全体会、後半が分科会という日程で、前半の全体会では、今後の教師教育の研究を考える上で重要な予算の軸となる現代GP、教育GPの現状について、今年度採択になった大学から報告がありました。各大学の取り組みが、今後の富山大学の教員養成機能の充実にとって、参考になりました。後半の分科会は、各自の専門分野によって3つの部会に別れて参加しました。教育工学情報教育部門では、以下のような報告がなされました。

(1)「ICTスキルアッププログラム」の紹介：マイクロソフトが社会貢献の一環として取り組んでいる、パソコンなどの情報機器の教育活用のスキルを習得するテキスト作成の事業について説明がありました。テキストは、小学生、中学生を対象とした学習者用のテキストと、教師用のスキルアップを目的とした校務編、授業編合計4冊が利用できる。今回は、センター協議会を通じて、全国の教育学部のある大学で教員養成のために活用する目的で、テキストをデジタルデータ化して提供してもらえるとのこと。このようなテキストを教員と学生の資質向上のための研修プログラムの充実に活用していきたいものです。(2)DVD教材「教師の力量アップをめざして」：センター協議会の3つの分科会が協力して作成したDVD教材の利用方法について説明がありました。これも(3)情報メディアの教育での活用事例集作成のプロジェクト：昨年度から課題になっていた、様々な情報メディアの教育活用に関する事例集の作成について、すでに割り振られた内容について、作業を進めていきたいという説明があり、了承されました。

#### センター協議会報告2

平成18年2月13日(月)に第68回国立大学教育実践研究関連センター協議会が、東京学芸大学を会場にして開かれました。出席者は市瀬センター長、佐伯、小川、稲垣の4名でした。全体会では、まず教員養成の方向性に関する、文部科学省高等教育局専門教育課教員養成企画室長の長谷川和弘氏の講演と、東京学芸大学学長の鷲山恭彦氏の講演がありました。続いてAPECの報告、教育臨床部門、教育実践・教師教育部門、教育工学・情報教育部門の各部門の活動報告が行われました。その後、予算案の審議が行われ、平成17年度の決算中間報告と平成18年度の予算案が了承されました。午後は、ワークショップ形式の討議を行い、教員養成にかかわる諸課題について4つの班で話し合い、それぞれの成果を発表しました。その後、分科会に分かれて討議を行った。市瀬・佐伯は教師教育の分科会に、稲垣は教育臨床の分科会に出席しました。今回の協議会の最大の話は、教員養成に関するGPにセンター協議会として共同で申請するということでした。現在、その詰めの作業が、主幹大学である東京学芸大学にて進められています。

# 業務報告

## センター日誌

### 平成17年度の実践センターの主な行事

平成17年	4月	5日	センター会議（第1回）	
	5月	13日	センター会議（第2回）	
		9日～10日	教育実習事前指導	
		25日	センター会議（第3回）	
	6月	3日	センター会議（第4回）	
		10日	センター会議（第5回）	
		22日	センター会議（第6回）	
	7月	6日	センター会議（第7回）	
		9日	現職の先生を対象とした研修会	
		20日・27日	教育実習事前指導	
	8月	2日	センター会議（第8回）	
	9月	2日	教育実習事前指導	
		5日	教育実践総合センター紀要編集委員会（第1回）	
		12日	日本教育大学協会北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会（上越教育大学）	
		15日	センター会議（第9回）	
		21日～22日	第67回国立大学教育実践研究関連センター協議会（香川大学）	
		27日	教育実践総合センター紀要編集委員会（第2回）	
		30日	日本教育大学協会全国教育実習研究部門研究協議会（弘前大学）	
	10月	1日	人間発達科学研究実践総合センターに改組	
		6日	センター会議（第1回、通算10回）	
	11月	6日	第3回中学生懇談会	
		12日	発達と臨床の心理学講座（第1回）	
		18日	センター会議（第2回、通算11回）	
		19日	発達と臨床の心理学講座（第2回）	
		26日	国際理解・開発教育研修会	
	12月	7日	センター会議（第3回、通算第12回）	
		22日	センター紀要第6号（通巻22号）発行	
	平成18年	1月	13日	センター会議（第4回、通算第13回）
			18日	教育実習運営協議会
		2月	10日	センター会議（第5回、通算第14回）
			12日～13日	第68回国立大学教育実践研究関連センター協議会（東京学芸大学）
			16日～18日	ビジュアル・トライアスロン
			24日	「子どもとのふれあい体験」体験交流発表会
3月		5日	マルチメディアセミナー	
		7日	センター会議（第6回、通算第15回）	
		31日	センターニュース第22号発行	

印刷 平成18年3月31日  
発行 平成18年3月31日  
編集発行 富山大学人間発達科学部  
附属人間発達科学研究実践総合センター  
代表者 市瀬 和義

〒930-8555 富山市五福3190

電話 076-445-6380